

「道徳の指導法」 についての研究（2）

—道徳的価値の実践の諸相—

大西 勝也

1. はじめに

前稿（1）で述べたように、道徳的価値の実現は、単純・一律にではなく、道徳的価値の喪失や欠乏、道徳的価値の実現をめぐる葛藤や迷い、人間の弱さが伴うことがしばしばある。道徳的価値の実現の奥行きのある実相をきめ細かく見渡すことなく、道徳的価値の実践を単純に考え志向することは、現実からかけ離れた理想論に終始しかねない。

そこで、本稿では、前稿に引き続き、道徳的価値の実践の諸相を解き明かしていきたい。

2. 道徳的価値の実践の3類型

道徳的価値の実践のあり方とその影響については、大きく分けて次のようなタイプが考えられる。即ち、「すばらしい」、「当たり前」、「よくない」の3類型（タイプ）である。

①第一の「すばらしい」というタイプ

結果的にみて一部の才能ある、あるいは、勇気のある人にしかできないことが成し遂げられる、というタイプである。いくつか例を挙げてみる。

○すぐれた結果を残したアスリート、例えば、オリンピックでメダルを取った人たちがいるが、この人たちは、勇気、努力、勤勉、健全な生活といった道徳的な価値を体現した人たちである。その成績とパフォーマンスが多くの人々に感動や勇気・元気を与える、そして、その人

のメダル獲得に至るまでの精進や努力のプロセスにスポットライトが当てられ、人々は関心をもってそのプロセスから道徳的教訓を得ていく。そのアスリートの方も、メダルという結果的に周囲に与える影響力を自覚しながらさらに精進し、国民にとってよきモデルとして社会貢献に尽力する。

○世の中には、いつの時代にも、命をかけて「勇気」、「正義」、「人間愛」などの道徳的価値を実践した人たちがいる。誰にでも真似できるものではないすばらしさの体現者という受け止め方がされる。マザー・テレサ、キング牧師、最近シリアで取材中に亡くなった日本人ジャーナリスト山本美加さんといった道徳的価値の体現を行い続けた人々。有名・無名は問わない。また、道徳的価値の体現をある一瞬の行為を通して示し、伝説となる人もいる。例えば、電車のホームで転落した人を助けた人。その時、自分の命を落としてまで助けたとなると、それは美談として語り継がれ、伝説となる。それは誰にでもできることではない。「人間愛」「勇気」という

言葉でもって説明し切れない、他者を思う生き様のすごさが感銘を与える。たとえ、他者愛が自己愛より発するという解釈を聞いたところで感銘の深さには変わりはない。

○身の回りすなわち、自分の暮らす地域にも、道徳的にすばらしい、模範的生活をしている人たちがいる。そういう人たちは、仕事なり、ボランティアなり、人一倍献身的な地域貢献が地

域の人々の心をとらえる。

②第二の「当たり前」というタイプ

誰もがするように、日常生活の（時に平凡とも思われがち）生活を送っている中には、多くの道徳的価値が当たり前のこととして実にたくさんの人に実践されている。ありとあらゆる生活分野の人々によってである。普通に生活するとは、「仕事時間中は一生懸命働く」、「誠心誠意、患者やお客に対応する」、「時間通り出勤し、指定の時間に相手に会う」、「時間通りに仕事をし、例えば、定刻通り列車を発車させ、到着させる」、「交通ルールやマナーを守る」、「喫煙者であっても、歩きタバコはしない」、「相手との契約・約束を守る」、「健康管理に気を払い、節度ある飲食をし、規則正しい生活リズムを保ち、適度な運動を心がけ、薬物摂取などの危険な誘惑は退ける」、「不正への誘いを拒絶する勇氣を持つ」、「使用禁止区域での携帯電話使用は控える」、「家族を愛し、友人を大切にす」、「礼儀を重んずる」、「集団生活、社会生活で自然な心遣いをする」、「きずな・支え合う心、協力する態度をもって、他者とともに生きていく」等・・・例には、枚挙に暇が無いが、これらのことは、日常生活においては当たり前すぎることであり、改めて云々することでもないが、これらのことが普通に（当たり前）に行われることで、やっと、社会は成立していることは忘れてはならない。もし、電車の運転手が不注意や怠慢を繰り返し平気でやっていたら、社会生活はどうなるであろうか。困る人たちがたくさん出てくる。日常では、こうした正確な仕事ぶり、「誠実」で、「勤勉」な仕事ぶりが当たり前だが、その「当たり前」が壊れたとき、「当たり前」のすばらしさが実感されることとなる。

道徳的価値は、それが喪失されたときと、当たり前にならなくなったときの状況の落差を考えると、その意義をよく自覚されるのである。と言うよりは、痛感されるのである。「健康」が当たり前と思って生活してきた人が、「健康」をひどく害したりすると、「健康」という「当

たり前」のすばらしさを妙に納得するものである。道徳的価値そのものではないが、当たり前存在していたもの—当たり前存在者—の価値は、それが失われたときにわかるということは、誰しも経験する。例に出すまでもなく、自分にとって大事な人の場合は深刻極まりない。

③第三の「よくない」というタイプ

人間、「魔が指す」というか「うっかり」というか、「誘惑を受けて」道徳的価値を喪失し、道徳的価値に反することをついやってしまうことがある。「食べ過ぎ、飲み過ぎて、体調を壊す」とか、「相手を喜ばせようとして大げさに話を誇張したり、嘘をついたり」することは、人間には時に起こりうる話である。しかし、それが何度も繰り返されると習慣化して、常態化してしまうところに怖さがある。子どもの成長する過程において、大人や社会への反抗心の高まりが見られることは、個人差があるにしても、よく知られている。反抗心は一部、独立心の現れであり、周囲が理解できるところもあるが、それには許容範囲があり、その反抗心から来る逸脱行為に対して社会からの反作用が起こることが、子どもと社会の双方にとって重要なのである。

さて、ここで注意を払うべき事柄は次のことである。すなわち、致命的、取り返しのつかない悪事に関しては、それを行った人間、加害者と、その被害を受けた人間、被害者及びその身内との間に、意識における道徳的重大さや苦痛において埋めがたい差が歴然として横たわっているということである。本人のちょっとした過失でもって他人の命を奪ってしまう「交通事故」、自分の征服欲を満ちし、ストレス解消の快感のお遊びのつもりで些細なことと感じて相手の未来を心身において奪ってしまう「いじめ」、些細な口論から激情して手を振って結果的に相手を殺害してしまった電車内トラブル、その開放感・快感の体験をちょっと味わってみたいと始めたのが病みつきになり、幻覚に襲われ、他人に致命傷を負わせてしまった薬物

中毒、愛国心から自国の正義のためと称して起る他国とのトラブルや衝突等など。これらの例に言えるのは、前述したように、加害者の苦痛は、被害者のそれとは比べものにならないほど軽い苦痛であり（たとえ、加害者本人の罪悪感が後から生じ、その後、ずっと本人を悩ませ続けたとしても）、それ故にこそ、取り返しのつかない結果を被害者の立場に立って予想しそこなうのである。これらの悪事は、全く意志がなく、技量・能力の欠如やたまたまの不運で起こる場合、理性でもって感情や欲求をコントロールできず、よくない誘惑に負けてしまう場合、節度ある話し合いと交渉に忍耐できずに実力行使に出る場合に起こる。

なぜ、こうした悪事が起こるのか、人事と思うのではなく、自分も含めた人間の社会・世界でこれからも起こりうることとして、その原因・理由を知り、そこから教訓を学び、知恵を見つめることが大切である。そして、自分に何ができるか、悪事を犯し、人生を決定的に失敗しないために、考えることが肝心である。とりわけ、悪事が軽度のものか深刻なものかということの認識も大切だが、悪事は本人が思う些細なことの積み重ねが逸脱行為と破滅に繋がることや、また、ちょっとしたことで加減の具合でいつでも致命的な結果に至りうることへの注意は、すべての人にとって必要である。ちょっとした快感をと思って始めた脱法ドラッグの吸引が続いて、習慣化すると心身の破滅までに至る例。ほんの遊びのつもりで相手の首に手をやったら致命傷を負わせてしまった例。何十年も仲睦まじく暮らしてきた夫婦が、たったおかげのことで口論し、思わずカットなって、夫が妻を殴り、殺害してしまった例。ほんのちょっとしたことのつもりが、一気に軽度の悪事を乗り越えて重篤な深刻な悪事に結果するという人生の怖さを、子どもの時から知っておくべきである。ちょっとしたことが取り返しのつかないことになるからこそ、人生には細心の注意と自己コントロールが常に必要だということを死ぬま

で心に留めておく、これが道徳的価値の実践の基本と言ってよい。

以上、人生は、道徳的に見れば、すばらしい、当たり前、よくない、の三つのドラマから成り立っている。

3. 道徳的価値の実践に必要なもの

道徳的価値の実現は、迷いや葛藤を伴ったり、そのあり方にも大きく3つのタイプがあり、単純・一様ではないことをこれまで見てきた。そこから、道徳的価値（その実践の方策を含む）を良心的・主体的に選択し、強い意志でもって実践していくことの重要性が見えてくる。しかし、話は、まだ、それで済まない。心は良心的であって強い意志を持っていても、技量が足りず道徳的価値を実現できない場合がある。というのも、人間の行為選択において、適切な状況把握を行い、それに基づいて適切な方策を導き出す際には、知識・情報・技能を有していないと対応できない問題は、今日、ますます増大している。

その例をいくつか挙げてみる。

- ①最先端の医療がもたらす、生命倫理に関わる問題・・・新・出生前診断⁽¹⁾
- ②原子力発電所の存続と核のゴミ処理の問題
- ③インターネットによる犯罪や人権侵害の問題・・・成りすまし、サイバーテロ、掲示板での個人への中傷、ツイッターで広がるヘイトクライム
- ④人権弾圧・非人道的政策を行う国家に対する国際的対応の問題
- ⑤領土をめぐる2国間の摩擦・緊張の問題
- ⑥脱法ドラッグの使用による薬物中毒の問題

ほんの数例を挙げたが、その問題や課題をしっかりと捉えるためには、その問題や課題に関わる歴史、現状や事実をしっかりと認識する必要がある。科学的知識・情報や技能を駆使しないと読み解けないことがらが、時代と科学の進歩

の中で、ますます増えている。新しい医療が開発されれば、それまで不可能もしくは困難であったことがたやすく可能となり、多くの人がある恩恵に預かることができる。しかし、医療の発展の根本にある医学の専門知識・情報は我々の健全な生活に欠かせない。脱法ドラッグの使用の問題も、医学的知識・情報を適切に用いて見ていくと、脱法ドラッグを使用すると、使用した人間の心身がどのように腐っていくかが、科学的に・因果系列的にははっきりとわかるのである。前述した①～⑥の問題には道徳的価値のいくつかにまたがることになる。その内、いくつかを指摘してみる。(< >内の表記は、「中学校学習指導要領 道徳 第2内容」に記載された道徳的価値の分類の番号である)。

①**自他の生命の尊重**<3-(1)>

人間愛の精神と思いやり<2-(2)>

②**自他の生命の尊重**<3-(1)>

自然愛護<3-(2)>

よりよい社会の実現<4-(2)>

③**人間の弱さや醜さを克服する強さと気高さ**

<3-(2)>

自他の権利の尊重, 社会の秩序と規律

<4-(1)>

公德心及び社会連帯の自覚<4-(1)>

正義に基づく差別や偏見のない社会の実現

<4-(3)>

④**愛国心**<4-(9)>

世界の平和と人類の幸福への貢献

<4-(10)>

上記のように、複数の道徳的価値が交錯する問題・課題であり、また、様々な専門分野の知識・情報・技術が問題・課題の理解及び解決のために必須である。さらに、その問題・課題の解決のためには道徳的に考えるだけでなく、関係する諸々の立場の利害調整への配慮や紛争調停の戦略が同時に追及されざるを得ない面があることも見落とすことができない。

「利害調整」や「戦略」という言葉の響きは、道徳的価値の実践にはそぐわないように思われ

る向きもあるが、必ずしもそうではない。そもそも、道徳的価値が実現される社会は、利害波及の世界とは全く別に成立しているというよりは、現実的にはかなり重なり合っている。むしろ、利害関係があり、時に死活問題にもなりうる競争現実のなかで対抗関係にある人間同士であっても、最低限の道徳的価値を守りながら、競い合うことで、社会の品位と平和がなんとか保たれるということは無視できない。「それでも、しかし、・・・」、「それだからこそ、かえって、・・・」という発想は、道徳的価値の動機として、極めて重要である。

4. 道徳授業における資料

以上のような道徳的価値の実践を「道徳の時間」としての「道徳」の授業で考えていくに当たって極めて重要になってくるのが、授業で用いる資料である。

日本道徳教育学会第80回(平成24年10月27日, 28日)の案内文が、平成24年5月, 各学会員に送付された。その案内文では、大会テーマ「道徳授業成否の鍵は資料にあり」と、大会テーマ設定の趣旨が記されている。その中に次のような文章がある。「道徳教育の成果が実感として伝わってこないもどかしさの原因は何であろうか。原因には色々あるが最大の原因は現在の道徳の時間は専ら「道徳的価値」を追求し理解させる指導になっている。道徳の指導が子どもたちにとって結論が見え透いた空々しい形式化した指導になっている。本当に子どもたちの心を捉え、人生的視野を広げ、将来への夢や希望が持てる授業になっていないことであり、トータルな人間としての在り方や生き方を問う時間ではなく、「足の髄から天井を見る」如く、一つの「道徳的価値」を理解する時間になってしまって、人や道徳性を育てる時間になっていないことである。個々の道徳的価値は見えるが、人の顔が見えない資料では子どもの道徳性どころか生きる力をもそぎ落として

しまう。」

この指摘にあるように、確かに、「道徳授業」で子どもが「道徳的価値」を理解することは大切だが、人間の在り方・生き方を問う中で子どもの道徳性（道徳意識）や生きる力が育つことは更に重要である。そもそも、道徳的価値は人間という血肉を通してぬくもりのある生き生きとした生命を輝かせる（道徳的価値の身体化・受肉化）。人間による道徳的価値の身体化こそが、道徳的価値の実践である。道徳的価値ばかり理解しても、道徳的価値に特化して資料を読み解き、その価値の意義を自覚したとしても、それはそのときだけの話に終わり、時間の流れの中で印象は薄れ、実感を持って得たような意味づけがあったかは怪しいものとなっていく。

多くの道徳授業が、生徒の学習動機からすると、わかり切った見え透いたテーマの意義をテーマにまつわる、どう答えてもよい答えのない問いについて自由に考えるという時間の流れに身を任せ、授業を受け流していく、いわゆる、消化試合のような授業体験の積み重ねが続く。

道徳授業が生徒と教師の双方にとって大切なのは、自己を含めた人間（の在りかたと生き方）と出会う場であるということではないか。人間のすばらしい、当たり前、よくない面に資料を通して具体的に出会い、自分という人間の中に潜む可能性としてのすばらしい、当たり前、よくない面を垣間見て、一回限りの人生をどう生きるか、いろいろ真剣に考え合い、語り合う、一人一人の人間が主役の時間なのではないか。主役は人間であり、大切なのは、人間（自己）の道徳性と生き方が高まることであり、理解対象としての道徳的価値の内容項目ではない。内容項目は、人間（自己）について考える際の切り口・視点であり、その理解に重点を置きすぎないことである。

そこで、道徳授業の指導法においては、自分を含めて人間の在り方や生き方を考えるきっかけづくりが重要となる。換言すれば、考えるきっかけとしての資料が鍵になる。その資料は、

人間を具体的イメージとして生き生きと生徒の心に迫ってくるものであることが望ましい。もちろん、資料だけでは十分でなく、その資料を生かす指導法が要求される。

しかし、指導法は、資料の中身に相応し、実際のところ、資料の中身が指導法を規定してくるとさえ言える。

余談になるが、筆者は大学の「教職に関する科目」の「道徳の指導法に関する科目」の授業を担当しているが、その授業の中では学生たちが道徳授業の模擬授業を行うことになっている。

また、学生は模擬授業をする際、同時に、学習指導案を作成してくることになっている。模擬授業の実践とその学習指導案の提出に先立って、授業の構想や指導案について何回か事前に相談を受けた上で指導を繰り返すのだが、その準備段階で見せられる学習指導案やその略案を見ていると、授業のテーマ名（道徳的価値の内容項目）に、「いじめ」、「臓器移植」、「障害者差別」といったような道徳的価値の内容項目ではなく、資料名というべき資料の中に登場する具体的な問題や課題がテーマとして記されていることが多々ある。（もちろん、指導過程で修正はする）。これは、何を意味しているのか。こうした記載の仕方をしている学生たちの大半は、道徳的価値の内容項目をすでに知っている。しかし、彼らにとって重要でインパクトが強いのは、自分が持つ道徳的価値の内容項目の視点に映った具体的な問題や課題の方である。

更にいうならば、学習指導案にテーマとして記述されるところまでいかなくとも、多くの模擬授業の様子を見ていると、そこで資料の中に登場した「赤鬼と青鬼」、「ドラえもんとおび太」、「イチロー」、「加納治五郎」、「長嶋茂雄と松井秀喜」、「杉原千畝」・・・といった人物、擬人化された架空の人物の生き方や変容にスポットを当て、そのドラマの中に生徒たちを導き入れ、共に人間の可能性と生き方について深く考えていく姿勢が見られ、その考えていく視点と

して道徳的価値の内容項目が示されているという印象が強い。ここには、模擬授業を行う学生たちのある姿勢が見て取れる。それは、「人の顔が見える」資料による人間の生き方が具体的にイメージできる実在感あるいは人間ドラマとそこから誰の目にもはっきり読み取れる、明日生きることへのメッセージそのものに焦点を当てたいという姿勢である。私たちが、道徳的価値の存在を実感し、その大切さを受容するのは、人間の具体的な生き様を通してである。いわゆる人間による道徳的価値の身体化を通してである。

道徳的価値という視点は、人間ドラマの資料の本質を読み取る際に、そして、資料に自己をリンクさせたり、資料からのメッセージを自己に投影し、自己を振り返るとき、どうしても必要になる。また、資料に表れた人間ドラマの背景や状況（ときに歴史的経緯）といったいろいろな要因が複雑にからんで構成されていなければならないほど、資料の中身を整理して捉えるための道徳的価値の視点が重要となる。世界の混沌とした広大な事象を整理してみる視点を与えるのが、科学や学問、また、芸術・文学であったりすると同じく、複雑な現実の生活世界を道徳的関心から整理して読み解くのが、道徳的価値の視点、もっと正確のいうならば、「道徳的価値に基づいた人間としての生き方」⁽²⁾ という視点である。道徳授業では、人間のよりよい生き方に何らかのインパクトを与えらると思われる資料の登場人物、とりわけ主人公の登場人物との出会いの中で、想像力を働かせ、資料の主人公が経験したことを追体験することにより、道徳的価値という視点から主人公の生き方をその背景・状況・経緯を含めて、意味深く考えていくのである。そして、実際は、資料の主人公ではない一人一人の自己は、この考えたことを踏まえ、ここで問題となった道徳的価値に基づいて「人間として」これからの自分の人生をどう生きていくべきかを更に考えていくのである。

同じ人間として、あるいは、同じ人間どうし

の関わりの中で大切なものである道徳的価値の視点・道徳的価値に基づいた人間としての生き方の視点に立つとき、資料の主人公と自己は同じ「人間」の地平に立ちリンクするのである。

5. 「読み物」や「体験」の資料の扱い

「中学校学習指導要領解説 道徳編」の「第5章道徳の時間の指導」の「第3部学習指導の多様な展開」の「2 多様な学習指導の構想」⁽³⁾ では資料としてどのようなものが考えうるか、ヒントが語られている。それを資料の種類という観点から読み替え整理すると、(1) 多様な読み物資料、(2) 日常生活や学校生活での体験、(3) 各教科等での学習内容、といったものが道徳授業の資料として挙げられている。ここでは、(1) と (2) について少しばかり言及してみる。

「(1) 多様な読み物資料による学習指導」についての記述では、「読み物資料を学習指導の中で効果的に生かすには、登場人物への共感を中心とした展開にするだけでなく、資料に対する感動を大事にする展開にしたり、迷いや葛藤を大切にしたりした展開、知見や気づきを得ることを重視した展開、批判的な見方を含めた展開にしたりするなど、その資料の特質に応じて、資料の提示の仕方や取り扱いについて一層工夫が求められる」とある。「工夫」されることは重要だが、すでに述べた諸々の要件を生徒に喚起するだけの内容が資料の中に含まれているということが前提になることは注意しなくてはならない。もちろん、資料が指導の工夫も含めてどれだけのインパクトを与えうるかは、やってみないとわからない面が常に付きまとうが、授業者が道徳授業に先立って資料と正面から向き合い、先入観なく読み込んだとき、授業者自身が上述の要件を喚起され、道徳的メッセージを力強く受け取ることができ、そのメッセージを他の人たちと共有したいという思いが生じるかどうか、まず大切と考える。これは、授業者の

主観的意識の話ではあるが、このことが成立しないときは、授業でその資料を使うべきではない。授業者が資料から道徳的インパクトを受けずして、その授業に真実味が生まれるはずもない。スタートからすでにつまずいているのである。

ここで忘れてはならないもう一つ大事なことがある。それは、資料の登場人物の「変容」ということがらである。「百万回生きたねこ」⁽⁴⁾の主人公のトラねこの意識や生き方があることを境にして変容していく。資料のストーリーにおける登場人物の変容は、資料の内容を押さえる際にとても大切である。人は完全ではなく、変わりうる。変容(生成)する存在、それが人間と言える。それだから、教育があり、学習があり、成長・発達がある。道徳教育もそうである。この変容は、道徳教育でもキーワードの一つと言ってよい。

この「変容」という観点から言えば、資料の登場人物、とりわけ、主人公が、道徳的価値の実践のあり方「すばらしい」・「当たり前」・「よくない」の3種類のうち2つ、もしくは、3つを体現しているケースもある。そうした資料内容では、「変容」という点を考慮して指導の工夫が求められてくる。資料には、道徳的価値の実践に関して、今挙げた3類型に当てはまらないグレーなあり方もある。そうしたあり方に遭遇した主人公がそれまでの経験したことのない行為の選択を迫られ、主人公の意識が大きく変容するケースである。これは「ジレンマ(葛藤)授業」として扱う資料に含まれてくる。この場合も、「変容」にスポットが、道徳的価値に基づく人間としての生き方をめぐって、当てられるのであり、資料もこの「変容」という点を意識化できるように扱われることが重要となってくる。

「(2) 体験を生かすなどの学習指導」では、「道徳の時間において、職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなどの多様な指導方法の工夫を行うことが

考えられる。・・・生徒が日常の体験を想起する問いかけをしたり、また、体験したことの実感を深めやすい資料を生かしたり、実物の観察や実験等を生かした活動、対話を深める活動、車椅子体験やアイマスク体験などの模擬体験や追体験的な表現活動を取り入れたりすることも考えられる」⁽⁵⁾と述べられている。ここで挙げられている体験・模擬体験は、道徳的価値の実践そのものではないことが多く、これらの体験は、道徳的価値の実践に焦点化された、道徳的価値に基づく人間としての生き方を考えるインパクトあるきっかけと位置づけられる。そこでは、体験をふりかえり、道徳的価値・道徳的価値に基づく人間としての生き方の視点から、体験を意味づけ、経験にまで昇華していくことが肝要となる。

(続く)。

註

- (1) 2013年3月28日の朝日新聞の夕刊の1面のトップに「陽性だったら」揺れる覚悟」という見出しで「新型の出生前診断」の記事が掲載されている。その記事の説明によると「新型の出生前診断」とは、「妊婦の血液で胎児のダウン症などの染色体異常がわかる」診断である。「妊婦の血液で胎児の3種類の染色体異常が高い確率でわかる。採血だけで簡単にでき、「十分な情報がないまま検査を受ければ命の選別につながる」との指摘もある。日本産科婦人学会は指針で、対象を他の検査で染色体異常が疑われた場合や高齢妊娠などに限定。「十分な遺伝カウンセリングができる」と日本医学会認定した施設のみで行う。現在(2013年4月28日現在)15病院が認定されている。血液は米国の検査会社に送られ、2週間で結果が出る。
- (2) 文部科学省、中学校学習指導要領解説「道徳編」、2008年9月、P.79。
- (3) 前掲書、P.90～91。

- (4) 佐野洋子『100万回生きたねこ』, 講談社, 1977年。
- (5) 文部科学省, 中学校学習指導要領解説「道徳編」, P. 91。